

林業グループ活動優良事例集

平成 14 年 8 月

徳島県林業研究グループ連絡協議会

はじめに

21世紀に入り2年目を迎えますが、林業や山村を取り巻く状況は、木材価格の低迷、林業生産コストの増加等から採算性が悪化し、また、林業就労者の減少、高齢化が進み、依然として厳しいものとなっております。

平成13年7月に森林・林業基本法が制定されました。「森林の多様な機能を持続的に発揮させていく」ための森林の管理・経営を重視した方向に政策転換され、いま、林業のあり方や山村のあり方が問い直されております。

林業グループ活動は、産業として林業振興を考えるとともに山村社会の担い手として、それぞれの地域における豊かで楽しい生活の提案・実践を行う地域おこしの運動でもあります。

林業の仲間・林業グループの皆さん、徳島県林業研究グループ連絡協議会というネットワークを活かし、地域社会の変化に真正面から取り組み、森林・林業へのニーズに的確に対応して行こうではありませんか。それぞれの活動は、点の行動であっても、それが線になり、そして面となって、厳しいと言われている現状を変革できる大きな力となり得るものと確信しています。

このたび、平成7年度から新しいシステムで再スタートしました林業グループコンクール中・四国大会及び全国大会に出場されました徳島県代表の素晴らしい活動事例と、さらに全国大会の最優秀事例を「林業グループ活動・研究事例集」（全国林業研究グループ連絡協議会発行）により取り纏めました。

様々な林業グループ活動から学ぶことは多いと思います。ぜひご一読願ひ、これからの林業グループ活動の参加にして頂ければ幸いです。

最後に、林業グループコンクールの参加に当たりまして、徳島県をはじめ町村の皆様、特に、ご熱心にご指導を頂きました普及指導担当の皆様には大変お世話になりありがとうございました。改めて心から厚くお礼申し上げます。

平成14年8月

徳島県林業研究グループ連絡協議会

会 長 橋 本 堅 次

も く じ

《林業グループコンクール大会参加》

1. 徳島県優良事例

平成7年度	日和佐町青年林業者会議（日和佐町）	1
平成8年度	三野林友会（三野町）	4
平成9年度	阿波池田やまびこ会（池田町）	7
平成10年度	彩女会（上勝町）	10
平成11年度	古宮林業推進会（穴吹町）	13
平成12年度	木頭村林業振興会（木頭村）	17
平成13年度	The 山師（美郷村）	21
平成15年度	阿波池田山水会（池田町）	24
平成16年度	上勝なでしこ愛林会（上勝町）	27

日和佐町青年林業者会議

所在地： 徳島県海部郡日和佐町赤松字耳瀬 115

代表者： 上原豊七

設立： 平成2年12月

会員： 男12人

年齢： 22歳～39歳 平均30歳

主なプロジェクトのテーマ

- 林業技術、林業経営の研究
- 林業後継者の育成
- 地元小学生を対象とした森林、林業教育

1. 地域の概況

「日和佐町青年林業者会議」の活動している海部郡日和佐町は、徳島県の南部に位置し、北は本県有数の林業地である木頭林業を有する那賀郡と接し、南は、室戸・阿南海岸国定公園に指定されている黒潮洗う雄大な風光明媚な海岸線が続く太平洋と面しています。また、郡内を流れる海部川、日和佐川、牟岐川といった河川は高知県の清流四万十川と肩を並べるほどの清流となっており、太平洋へと流れています。

このように、この地域は山や海や川といった豊かな自然環境に加えて、アカウミガメの産卵で有名な大浜海岸や四国八十八カ所の二十三番札所厄除けの寺、薬王寺などの観光や文化的資源にも恵まれた地域となっています。

2. 地域林業の概要

日和佐町の森林面積は、10,596ha（民有林：10,484ha、国有林：112ha）となっており、その林野率も90%と森林の占める割合が高くなっています。また民有林の人工林率は61%であり、県平均の63%に比べ、やや低く、その人工林に占める35年生以下の保育の必要な若齢林分は全体の約7割を占めています。

一方、海岸部や里山地帯にある豊富な天然広葉樹資源は、この地域独特で古い歴史のある「樵木林業」と呼ばれる一種の広葉樹の択伐ぼう芽更新施業によりチップ材や薪炭材として利用されています。そして、この「樵木林業」は、近年の多様な森林整備や自然環境の保全の観点からその良さが見直されてきています。

しかしながら、その「樵木林業」に代表される天然林施業も輸入チップに押されその価格・生産ともに低迷しています。また、若齢林がほとんどを占める人工林施業においても、木材価格の低迷による経営意欲の減退や林業従事者の減少と高齢化また林道・作業道等の整備の遅れなどにより適正な森林整備が図られていないなど、日本林業が抱えている一様な課題が本町林業においても山積みしています。

3. グループの結成の動機

グループ結成の動機は、先に述べた林業の抱える多くの課題解消には、地域に残っている林業後継者が共に考え共に行動し身近な一つ一つの課題について地道に取り組む努力が何より大切だと考えたからです。そして、一人親方と呼ばれる小規模の林業事業体がほとんどで、ふだん林業後継者同士が知り合える機会が少ない現状を考えても、林業後継者の組織化による情報交換が必要と考えました。父親が林業を営んでいる関係から、林業後継者の組織化は比較的容易に進み (1) 会員相互の親睦と資質の向上 (2) 会員の情報交換の場作り (3) 林業後継者の育成などを目標に掲げ平成2年12月「日和佐町青年林業者会議」が結成されました。

4. グループ活動の状況

グループ活動の状況は、発足当時は間伐、枝打ちといった林業技術等に関する研修会の開催、林業先進地調査、県や町の主催する森林・林業関係のイベントへの参加協力などを中心に活動し、会員の林業に関する知識・技術の向上が大分図られました。こうした活動のなかで、農業・漁業など他の産業分野の後継者グループとの交流も刺激となり、グループ内だけに留まらず、地域一体となった取り組みも必要ではないかと考えるようになってきました。こうしたなかで、平成5年度から地域の学校関係者、県の農林事務所林務課をはじめ、町役場、森林組合等の協力を得て地元小学生を対象とした森林・林業教育活動が中心テーマへと変わってきました。

このことは、林業就労者の減少と高齢化が急速に進行していくなかで、林業後継者確保の問題は、林業後継者であるグループ員自らが一番強く感じているためであると思います。

この豊かな自然に恵まれている地元の小学生でさえ、山や海や川で遊ぶことの少なくなっている社会環境を考えると、この豊かな自然を活かした森林・林業教育を授業の中で取り上げてもらうことが大切と考えられます。地元の子供たちに少しでも生まれ育った故郷の自然を愛する心や森林・林業に対する興味を持たせることが後継者育成や地域への役割を示す上で、重要であると考えました。

具体的な活動内容としては、平成5年度が「シイタケの栽培教室」「野鳥の巣箱づくり等の木工教室」「森林・林業クイズ」等を実施しました。昨年の6年度は「森林・林業教室；日和佐川の源流を探る」と題した森林・林業体験ツアーを実施しています。

「日和佐川源流探索」で企画した主な学習テーマは、源流までにある樵木林業の施業地や地元特産物となっている阿波備長炭の炭釜施設やログハウスの見学を通しての「故郷の農山村での産業や生活についての学習」と日和佐川源流地点での「森林と水との関わりについての学習」などです。この取り組みは企画準備等で大変苦労しましたが、子供たちが興味を示してくれたことが何よりの喜びとなっています。

こうした地域と一体となった取り組みは地元マスコミにも取り上げられるなど大きな成果となりました。

こうしたグループ活動は、まだ始まったばかりですが、活動を通して、何より地域との連携が図れるようになったことで、情報交換も次第と盛んになり会員の資質の向上を図る上でも役立ってくるものと

期待されています。

5. 地域への波及効果等

こうしたグループの活動のなかで、次第と隣接する他町の林業後継者グループとの交流も行われるようになり、自然と海部郡単位での組織化の動きがおこり、海部郡一円の林業後継者クラブである「海部郡林業後継者連絡協議会（グリーンサークル）」への結成へと繋がっていったことも大きな成果の一つと考えられます。

こういった広範囲での組織の多くが各町のグループ単位で参画する連合会的な組織立てが多いなかで、この「グリーンサークル」は、郡内の林業後継者が自由な立場で参加しているもので、自然と海部郡内の若手林業後継者クラブが再編された格好となってきています。

この「グリーンサークル」での活動としては、会員相互や親睦や各種林業関係行事への積極的な参加等が中心となっていることをは言うまでもありませんが、どこの地域でも問題となっている林業後継者の嫁不足問題への取り組みがあげられます。農山村での嫁不足の問題は、男ばかりの林業という職場に加え厳しいと言わざるを得ない就労環境である林業後継者にとって、より深刻な問題となっています。

こうした問題は、海部郡の林業後継者の共通の課題となっているため、早速、「林業後継者パートナー確保対策」として取り組まれています。女性の楽しめそうなゲームやダンスパーティーなどの企画や厳しいが林業のすばらしさを少しでも女性に知ってもらうための交流会活動の中で、数組ではありますがカップルも誕生するなどの効果を挙げています。

6. 今後のグループ活動の目標

「日和佐町青年林業者会議」の今後の目標としては引き続き、地域と一体となった森林・林業教育活動の実施に加え、ますます厳しさの増す林業情勢のなかではありますが、今一番、本来の林業研究グループの姿に立ち返ることも必要であると考えます。先輩の林研グループが築いてきた伝統的林業技術に高性能林業機械化システム等を加えた新しい林業についての研修会。また、将来は女性でも働ける職場を目指した林業労働条件の改善への取り組みなども活動テーマとしていかなければならないと思っています。

三野林友会

所在地： 徳島県三好郡三野町大字芝生 1050-3

代表者： 林 岩 夫

設立： 平成2年7月

会員： 男34人

年齢： 35歳～70歳 平均56歳

主なプロジェクトのテーマ

- 枝打・間伐等育林技術の習慣
- 会員の経営面積等に応じた経営目標の設定
- 安全技術の習得
- 流通・加工情報の収集
- 低コスト林業の推進
- 芸術育林技術の確立

1. 地域の概況

当グループの活動する三野町は、徳島県の北西部、阿讃山脈の南にあり、「四国三郎」で有名な吉野川中流左岸に位置する。東は美馬郡美馬町、西に三好町、南は吉野川をへだてて三加茂町、北は香川県琴南町、仲南町に接している。

気候は、内陸型で、年平均気温 13.4 度、平均年降水量 1,328mm で比較的温暖である。

地質は、主として中性代の和泉砂岩層から成り、町の南部を中央構造線が東西に横切っている。

産業は、古くから葉煙草、養蚕等が盛んで、昭和 30 年代まで町経済を支えてきたが、経済構造の変化に伴い過疎化、高齢化が進展して来た。町ではこれによる遊休農地等の有効利用を図るため、昭和 60 年頃より工場誘致や若者定住住宅を推進し、今回の国勢調査では、約 100 名の人口増加を果たしている。

森林面積は、3,069ha で総土地面積の 71% を占め、人工林は 1,780ha である。人工林率は、58% と県平均の 63% に比べると低いが、ヒノキ林が、人工林の 65% を占める県下でもめずらしい（県下の 7 割がスギ）樹種構成となっている。

森林の経営規模は、98% が 10ha 以下の小規模所有者である。このため、三野町における林業経営は、他産業の閑散期に行われてきた典型的な農山村である。

2. グループ結成のあらまし

三野町の森林は、65% がヒノキ林であることから、小規模ながら良質材生産を目指し枝打ち等に熱心に取り組んできた。しかしながら、高齢化・過疎化に伴い、施業の共同化及び林業技術の向上の必要に迫られ、森林組合を中心に町内全域に働きかけ、平成2年に緑豊かな自然を基調とし、育林技術、流通加工技術等の習得を目的として林業に熱意のある者が集い、会員 29 名でスタートした。以後様々な事業展開を図る中で、現在では 34 名に達している。集まった会員の職種は、農業を始め、建設業、公務

員、教員、電気業等多種にわたっており、まさに「素人集団」の誕生であった。

3. グループ活動の現状

当グループは、林業に対する熱意は、高揚しているが、林業経営・技術については、十分とは言い難いため、次のとおり活動目標を設定している。

①枝打ち、間伐等育林技術の習得 ②会員の経営面積・樹種・林齢に応じた経営目標の設定 ③安全技術の習得 ④流通・加工情報の収集 ⑤低コスト林業の推進 ⑥芸術育林技術の確立

以下、具体的な活動について述べていきたい。

① 枝打ち、間伐等育林技術の習得

育林技術の習得については、年に2回程度、三好郡、美馬郡内の優良美林の視察をするとともに、会員の所有林において、「選木育林」及び枝打ちについての研修会を実施し、積極的に技術の習得に励むとともに自己所有林に選木を実施し、会員の所有面積約260haの内約50haに選木が施されており、各地域の模範林となっている。なお、「選木育林」の発案者である元徳島県林業専門技術員の杉山氏は、当グループの顧問としてご指導をいただいている。

② 会員の経営面積・樹種・林齢に応じた経営目標の設定

経営目標については、経営規模等により異なるが、良質材の生産を目指し、最終的には複層林へ誘導し非皆伐施業を実現することとしている。

ア ヒノキ

ヒノキの場合は、基本的に無節の柱材の生産を目指す。

(小規模の場合)

管理面積が小さいため、優良事例に基づき、繰り返し枝打ちを実施する。

基本指標としては、林分にもよるが20年生頃までに、枝下高8m、枝打ち回数5回程度を実施する。もちろん、曲がり木、傷材については、林内の状況により除伐を施す。

(中・大規模の場合)

経営規模が大きくなると、緻密な施業管理が難しくなってくる。したがって、スギの選木育林を応用し、立木の成育に差が生じてくる15年生前後に選木を施す。方法は、80～100年生の長伐期とするものを、5m間隔でha400本、30年生前後より順次3m柱の生産を目指すものをha800本、50年前後より6m通し柱の生産を目指すものha200本、合計でha当たり1,400本に印付けする。これにより施業目標が明確になり除間伐等の施業が容易になると同時に、30年生前後からは半永久的に林業収入が得られる状態に導き、林業経営の興味が失われないようにする。

イ スギ

スギについては、一部切り絞丸太の生産を目指す。床柱の需要を考慮し、基本的には選木育林早期仕上げ間伐を導入した、大径木準優良材生産を目指す。また、林間栽培を導入し中間収入を得ながら、最終的には複層林に誘導し、非皆伐施業を実施する。

③ 安全技術の習得

会の運営及び林業活動を継続的に実施するためには、非常に重要な項目である。このため研修会に

において、県林務課の指導を仰ぎ、チェーンソーはじめ簡易集材機等の安全な使用方法及び作業中の安全技術の習得に努めている。

④ 流通・加工情報の収集

平成7年度に県単補助事業を導入し、枝打ちの必要性及び枝打ち技術の実証、また、流通・加工情報の収集のため、会員所有の枝打ちされた良質材を製材し製品市場で販売した。これにより加工・流通を実体験するとともに枝打ちの時期等、技術の実証が得られた。

⑤ 低コスト林業の推進

低コストには、路網の整備を重点項目とし、補助事業を活用し簡易作業道を中心に開設している。会員の中に建設業がいることから比較的容易に開設でき、会員の中には、すでに200m/haに達している森林もある。

⑥ 芸術育林技術の確立

芸術育林は、当グループが取り組む中で大きなウエイトを置いている活動の一つである。材積収穫のみに視点を置いた育林から自然生態系に主眼を置いた育林への転換を図ろうとするもので、具体的には選木育林技術を中心に間伐・枝打ちを実践し、林内に桜・モミジ等の植栽、及び有用広葉樹の誘導を図り、小鳥等呼び戻すとともに、肥沃な森林土壌を創り、公益的機能を高度発揮させ自然生態系、人工美、収益性の極みを追及する育林方法である。

なお、会員の森林は2haのモデル林を設定し技術の確立・普及に努力している。

4. グループ活動が地域社会に及ぼした影響

当グループの特徴は、町内全域から林業に熱意のある異業種の者が集まって出来たグループであることである。そして、非常に熱心で研修会等の出席率は常に80%を割ることはなく、育林技術から加工・流通技術まで段階を追って賢明に取り組んできた。グループ活動の結果として、会員の在住する地域においてその所有林が見本林となり、地域に森林整備に拍車をかける形となっており、森林組合の事業量も人工造林が減少する中、保育等の増加により安定的な事業量の確保につながっている。会員の中から県の主催する育林コンクールにおいて知事賞の受賞及び、林業功労者として表彰されるなど大きな成果を得ており、林業従事者が減少する中、新たな地域林業の担い手として期待されている。

5. グループ活動の今後の方向

当グループは、特に華々しい活動をしているわけではない。しかしながら、本業である林業技術の向上に向けて着実に力をつけてきている。今後については、先に述べた「芸術育林」技術を確立し、地域住民の賛同が得られやすい育林への転換が必要になりつつある。このため、平成7年度に、良質材の製品出荷材を生産した林地において、植生調査を実施し、技術の確立に努め、これを地域に普及し、地域のリーダーとして林業の役割、地位の向上にむけて努力する事が重要である。

8年前「素人集団」としてスタートしたグループが「玄人集団」に変貌しようとしている。

阿波池田やまびこ会

所在地： 徳島県三好郡池田町佐野字金氏 954 番地

代表者： 西 森 利 子

設 立： 平成5年10月

会 員： 男2人・女17人

年 齢： 42歳～61歳 平均55歳

主なプロジェクトのテーマ

- 女性の能力を活かした地域の活性化
- 特産品の生産、加工、販売の振興

1. 池田町の概況

池田町は四国の中心部にあり、北は香川、西は愛媛に接し南は高知に近隣して讃岐山脈、四国山脈とつらなり、香川県と高知県を結ぶ一級国道32号線、徳島県と愛媛県が結ぶ二級国道192号線の交差点に当たり、現在四国縦貫道の工事が進められている。池田町の森林面積は13,800haで総面積の82%であり、人工林は55%の7,590haである。人工林のうちスギ45%、ヒノキ32%、クヌギ13%となっている。かつては、煙草が基幹産業で池田町の繁栄の基礎となっていたが第1次産業の低迷により第3次産業が中心となっている。町内には弘法大師が建立した雲辺寺（延暦8年）や箸蔵寺又は、黒沢湿原、祖谷温泉、そして甲子園でも活躍した池田高校があります。

今、私たちの住んでいる池田町佐野は、池田町の北西部に位置し愛媛県と香川県の県境に在る戸数約200戸、人口約600人の里山で杉・檜の人工林の他、クヌギ、ナラ林といった広葉樹も多く、古くから県下でも有数の乾しいたけの産地となっており、県下の生産量の62%を占めている。しかしながら、近年乾しいたけの生産も価格の低迷により減少傾向にあり、地域林業を担う生活環境も厳しい状況にある。

2. グループ結成のあらまし

私たちの住む佐野地域はしいたけ原木が比較的多くあったことから、古くからしいたけ生産がされており、昭和37年に男性中心による「佐野椎茸生産組合」が有志5名で結成され、視察研修や栽培技術研修を通じて、技術の向上を図りながら産地化を推進する一方、地域での仲間づくりを進め25名の会員をもつグループに成長した。また、しいたけ生産施設の共同化、作業道やほだ場の整備をすすめるなかで、生産量も増大し現在では県下一の産地となっている。

この間女性たちは、常に裏方として男性を支えてきたが、家族ぐるみでの協同作業等をすすめる中で仲間意識も向上し、椎茸生産組合の中に婦人部を組織し、先進地調査、県椎茸品評会、選別講習会等に積極的に参加し、女性としての活動の場を拡げていった。また、この婦人部を中核とした生活改善グループも組織され、椎茸を原料とした佃煮（しいたけの華）を普及員の指導のもと商品化に努力し、平成5年に開催された東四国国体に出品し好評を得て注文も多くなってきている。

こうした活動をもとに、もっと地域に密着した山村の振興と後継者が残れるような地域づくりを目的

として、平成5年に「阿波池田やまびこ会」を結成した。会は女性17名、男性2名で組織され、男性会員は佐野椎茸生産組合から情報収集等オブザーバーとして参加している。

3. グループの活動と現状

平成5年に結成以来常に、次の3点をテーマとし活動を行っている。

- (1) 女性の感性、母性の持つ力をどう発揮していくのか。
- (2) 地域の連帯を高めるため地域の中でどのような活動が出来、どのような役割を果たせるのか。
- (3) どうすれば末永く山を愛し、協力し合い、組織活動を続けられるのか。

① 特産品の開発

当初は、具体的に何をすれば良いのかわからず、話し合いを繰り返す中で、地域産物を活用した特産品づくりを行うこととし、加工食品の先進地調査、講習会等を実施し山麓の塩漬け、手作りこんにやく、いたどりの塩漬け等を作成した。

中でも、地域の主要産地である乾しいたけを生かしたいという会員のアイデアを基に開発した、乾しいたけの粉末を混ぜたしいたけうどんは、ヘルシー感覚いっぱい好評を得ている。

② 老人ホームへの慰問

毎年、長年地域のために努力された老人に敬意を表するため、開発した特産品や手作りそばを持って慰問している。

③ 佐野しいたけ祭りの開催

地域の連携を乾しいたけのPRを図るため、継続的にできる行事はないかということになり、平成6年特産の乾しいたけをメインとした佐野しいたけ祭りを開催することになった。この祭りの特徴は、阿波池田やまびこ会を主催として、地域内に在るスポーツクラブ、手芸の会等の参加と協力により実施しているもので、阿波池田やまびこ会が開発した特産品のほか、竹ぼう木等各グループの活動の成果品の展示即売や、焼きしいたけの試食、植菌体験、カラオケ大会等、回を重ねる毎に内容も豊富となり、小さな山里に県内外から毎年1,500人程度の人を集め、地域を一体とした行事となっている。

④ 震災芦屋中学生の民泊修学旅行の受け入れ及び交流

佐野しいたけ祭りの経験から地域内外との交流が大きな力になることを実感し、平成8年には中学生の民泊修学旅行を受け入れ、椎茸の植菌、田植え、茶摘み、家畜の世話等を体験し、その後も手紙、電話による交流がつづいている。

⑤ 「しいたけうどん」の商標登録

佐野しいたけ祭りで好評であった「しいたけうどん」を健康食品としてのしいたけのPRと新たな特産品にするため「やまびこ健香麺」として商標登録を出願しており今年の12月頃には取得の見込みである。

⑥ 「やまびこしいたけ」のブランド化と贈答用化粧箱の製作

佐野地域の乾しいたけは、県下のシェアを誇りながら、県内に選果市場がないため、これまで愛媛産として販売されていたが、佐野しいたけ祭りで好評であったことからブランド化への機

運が高まり、椎茸生産組合、生活改善グループと協同で贈答用化粧箱と乾しいたけの椎茸の佃煮の詰め合わせセットを製作し、今年の中元用から「ゆうパック」として販売している。

4. グループ活動が地域に及ぼした影響

- ① 女性の感覚で地域にある林産物を活用した特産物の開発に取り組んだことから「やまびこ健香麵」という新商品が開発され、しいたけの PR につながっている。
- ② 佐野しいたけ祭りの開催により、地域内のグループ間の連携が強化され、同時に各グループが佐野しいたけ祭りを自分達の活動成果の発表の場としてとらえ、これを目標に活動に取り組むため、地域の連帯意識は飛躍的に高まってきている。この成果を踏まえ、椎茸生産組合、生活改善グループ、阿波池田やまびこ会では平成8年に「オーイ佐野は元気会」を新たに結成し、他のグループとの更なる連携を図りながら、手作りの佐野地域振興計画の策定を進めている。
- ③ グループ間の連携を強化することにより乾しいたけを中心とした生産活動の活性化につながっている。
- ④ 徳島県の女性林業研究グループの連帯を目的として設立された「とくしまフォレストレディの会」における交流の中で、阿波池田やまびこ会の活動を紹介し、他の女性グループにも大きな刺激を与え地域の活性化につながっている。

また、池田町内にも平成8年に新たな女性グループが誕生するとともに、隣接町村の三好町でも平成9年に女性グループが誕生する等、女性を中心とした地域振興の輪が拡大してきている。

5. グループ活動の今後の方向と課題

(1) 交流の拡大

- ① 佐野しいたけ祭りの更なる充実と工夫
- ② 佐野地域全体を更に PR するための地域マップの作成
- ③ 交流促進による地域外とのネットワークの整備

(2) 地域特産品の開発と販売

- ① 地域産物を活用した特産品の開発と工夫
- ② 特産品の販売拠点としての国道沿いでの販売施設の設置
- ③ 消費拡大にむけての生産者自己紹介リーフレットの作成

(3) オーイ佐野は元気会への参加

- ① 高速時代に向けた佐野地域振興計画への参加と実践

今後も先に掲げた3つのテーマを基に会員間の協力、地域間の連携を強めながら地域の活性化に努めていきたい。

彩 女 会

所在地： 徳島県勝浦郡上勝町福原

代表者： 中 山 多与子

設 立： 平成 2 年 8 月

会 員： 女 10 人

年 齢： 39 歳～74 歳 平均 57 歳

主なプロジェクトのテーマ

- 地域農林産物や草花を素材とした押し花製品、木工クラフト製品等の作成・展示・販売を通しての地域の活性化及び都市住民等との交流

1. 地域の概況

上勝町は、四国山脈の東南に位置し、森林面積が、総土地面積の 86%にあたる 9,373ha を有する林業地帯です。人工林率は 83%に達しており、樹種別面積はスギが 94%で大部分を占めています。北部、西部は剣山と中津峯を結ぶ分水界の一部を形成する雲早山、高丸山、旭ヶ丸山等の 1,000m級の連山がそびえています。地形は、標高約 100m～1,400mとその高低差は大きく、標高 600m以上の地域が 65%を占めています。

気候は、紀伊水道に流入する黒潮の影響を受け温暖で、年平均気温は 14.5 度、年平均降水量 2,584mm で、林木の生育に適した気象条件となっています。

人口は平成 7 年国勢調査結果によると 2,318 人ですが、減少傾向が続いており、特に若年層を中心とする人口の流出が著しく、年齢構成は年々高齢化しており、高齢化率は 37%に達しています。このような人口の流出と高齢化は、町内各産業の生産活動を低下させ、都市部との所得格差を一層広げる傾向にあり、本町の基幹産業である農林業の担い手を確保する上で重要な課題となっています。

典型的な過疎の町である上勝町ですが、1986 年に生まれた「彩（いろどり）」という事業によって、全国から注目されるようになりました。彩は、料理に添えられる「つまもの」の商品名で、木の葉や草花等を季節の演出材料として出荷しており、年間の売上額は 2 億円を超し、押しも押されぬ町の一大産業です。

また、上勝町では、平成 5 年からは「1Q（いっきゅう）運動」に取り組んでいます。これは、一休さんのように住民が知恵をしぼって地域の問題を主体性に解決しようという運動で、地域住民が様々な活動を行っています。

2. グループの結成の動機

「子どもや若者の夢を満たせる豊かな感性と健康性に富む教育・文化・福祉の町」

「地域資源を活かして自立を目指す、彩ある産業の町」

「美しい自然環境の中で、外部から移住したくなるような、町を彩る快適な住環境の町」

これは、上勝町が目指している町づくりの目標です。

この目標をもとに、何かをしたいという人の仲間づくりをスタートしました。

自己所有の森林は、小面積のため林業での自立は難しいと考えられ、そうした中で、上勝町にある資源を活かして何か特産品作りをしたい、また、次代を担う子ども達に上勝町の良さを知ってもらい定住が進めば良い、そのために何か残せるものが欲しい、という同じ想いを持った仲間が集まりました。とにかく何かをはじめようということで、町の助成を受け、九州から講師を招いて原色押し花の技術を学び、特産品作りと文化伝承に取り組みはじめました。そして、押し花だけでなく、河原の小石や木の実、間伐材等、身近な資源を利用して、様々な活動を展開する彩女会が平成2年8月に発足しました。

取り組みが進むにつれ、作品の作成や展示、材料を保管する場所等が必要となり、旧郵便局の局舎を借り受け、「彩工房」と名付けて活動拠点としました。この工房は、築54年の木造2階建てで、歴史と文化を感じさせるたたずまいです。

3. グループの活動状況

現在、会員は10名で、30歳代～70歳代までと、幅広い知識と行動力で頑張っています。

主な活動

- (1) 間伐材を利用した木工クラフト製品、地域の農林産物や草花を素材とした押し花製品等の作成・展示・販売

押し花は、上勝町で採れた草花を使います。小さな草花はもちろん、木の葉・牡丹・苺の果実等もすべて押し花にすることができます。製品には、しおりやハガキ、名刺等の小さなものから、大きいものでは押し花絵の額等もあります。

最初は押し花で一躍有名になった彩女会ですが、地域の資源として間伐材等にも目を向け、デコパージュとトールペイント、籐かざら等のインテリア、木の実を使ったアクセサリーの木の枝を利用した木工作品作り、プランター作り等の特産品開発にも取り組んでいます。これらに使う材料は、会員の山で伐った木のほか、町の第3セクター「もくさん」や製材所から譲り受けるものもあります。ある一面から見れば、ゴミになってしまうものですが、少し手を加えれば、すばらしい特産品が生まれます。

また、平成3年より毎年9月には、徳島市内の美術館ギャラリーを借り受け、講習会参加者の作品展示会を開催して、日ごろの作品をみてくださった方々の批評の言葉を励みにして頑張っています。平成7年からは、作品の展示会と並行して、上勝町からのメッセージとして、情報の発信も行っています。これは、森林に対する理解を得てもらおうという試みではじめたもので、町内の風景写真や、樹木の苗木の展示等を行います。

- (2) ふしぎな花倶楽部インストラクター活動（住民との交流活動）

平成4年からはじめた活動で、講師の免許を取得したメンバー10人を中心に、地元の子も達への講習会を含め県内各地で定期的に講習会を開催し、各地での講師の養成や土産品作りにも一役買っています。

こういった活動では、教える側の私たちも大変勉強になります。

(3) 県や町村の森林・林業イベントへの参加・協力

県主催の「山と木と緑のフェア」に参加して、木工クラフトの体験をしてもらい、都市住民との交流を図ったり、講師依頼があれば出かけて行って、講習を行ったりしています。木工クラフトは特に子どもに人気で、講習期間中毎日のように作品を作りに来る子どももいたほどです。

(4) 町内美化運動の実施

4. グループが地域に及ぼした影響

押し花については、取り組みが早かったおかげで、テレビ・新聞などにもたびたび紹介されて、それが一般市民への山村のPRとなったようで、上勝町を訪れる人が増加し、最近では年間およそ1,000人もの人が彩工房を訪れており、町の活性化にも一役買っています。また、展示会や、講習の開催によって、町内外との人的交流ネットワークが広がっています。

平成3年からは、地域産業教育の推進になればと、上勝町の産業のひとつとして地元中学生の視察に対応してきましたが、そのころ彩工房を訪れた中学生が社会人となり、最近になって「上勝町へ帰って彩工房に就職したい」という申し入れがありました。現在の体制のままでは、即受け入れはできませんが、我々にとっては、いろいろなトラブルや苦しみをどうにか乗り越え現在まで続けてきて、何よりうれしい言葉でした。

5. 今後の目標

最初は、地域資源を活用した町の特産品作りを目的にスタートしたグループでしたが、試行錯誤を繰り返しながら、会員みんなで知恵を出し合い進めてきました。周りの方の応援やめったにお目にかかれないような偉い大学の先生方、マスコミの方や、県外からわざわざお越し下さった視察の方等毎日のように人に出会う機会があり、最初は緊張しましたが、今は楽しみになっています。押し花や木工を体験して喜んで下さるのが大変うれしく、お金よむもっと大切な生き甲斐をいただいていると感じます。これからの時代、物の豊かさから心の豊かさを求めるようになってきているのだと思います。

都市側の人たちとの交流は、当たり前のように自然に囲まれていることがどれほど貴重なものかということに気づかされます。

彩女会は、いままでは「森に人を呼ぼう」ということをテーマにして、展示会等の活動をしてきましたが、今後はもっと具体的に、なぜ人を呼ばなくてはならないのか、どうすれば人が集まるのかといったことを考え、それを訴えかけるような活動をしていきたいと思っています。

彩女会の規約には、少々大げさに町の文化振興への寄与や町づくりへの参加を目的としていますが、今後、皆さんに喜んでもらい、地域社会へもできるだけ貢献ができるよう、そして我々が楽しみながらできることに積極的に取り組み、上勝町の資源「森林」と「自然」を活かせるような活動を今後も続けていきたいと思っています。

古宮林業推進会

所在地： 徳島県美馬郡穴吹町古宮

代表者： 谷 奥 歳 信

設 立： 昭和 43 年 9 月

会 員： 男 105 人・女 22 人

年 齢： 11 歳～75 歳 平均 53 歳

主なプロジェクトのテーマ

- 林道・作業道の促進
- 林業機械の導入推進
- 枝打・除間伐の推進
- 後継者対策チビッコ部会活動
- 交流の輪を広げよう

1. 地域の概況

穴吹町は、徳島市より吉野川を西へ 50km 遡った所に位置し、吉野川の支流で剣山より流れ出る水質四国一の清流、穴吹川が町の中心を流れる静かな町です。

森林面積は、総土地面積の 83%にあたる 9,000ha であり、人工林率は 62%、スギが最も多く、全体の 72%を占めています。

人口は、平成 11 年現在 8,000 人ですが、平成 10 年度の出生数は 45 人で、高齢化率は 27%であり、本町も全国的にみられる少子高齢化が急速に進んでいます。

産業は、町の基幹産業である農林業以外に目立った産業はなく、近年の農林業の著しい衰退により 9 割を越える兼業林家の大半は、現金収入を公共土木事業関係の仕事に依存する傾向にあります。

2. 設立の経緯

本会は、昭和 43 年 9 月に「林業で豊かな生活を築こう」を合い言葉に、60 名で結成し、拡大造林に取り組み、優良材生産への研究を重ねて活動してきました。造林も完成間近の昭和 50 年、51 年と 2 年連続の台風災害は、国から激甚災害の指定を受け、復興に 10 年余りの歳月を要し、その間、住民の相次ぐ集団移転、転職などに加えて、高齢化、木材価格の低迷により林業への意欲は急激に低下し、結成時、昭和 43 年の古宮地区の人口 2,550 人、550 世帯は、昭和 63 年には、500 人、220 世帯までに減少しました。本会の活動も年 1 回の総会を開催するのが精一杯の状態となり、昭和 63 年当時の執行部より、今後は若手を中心とした執行部で運営し、活動を活発化して欲しいとの強い要請があり、当時の会員 27 名のうち、若手を中心とした執行体制を組み、再スタートしました。

再出発にあたっては、

- ① 自主独立の精神を持とう（強固な自立心がなければ続かない）。
- ② 自主財源を確保しよう（自由に使える活動資金が必要）。

- ③ 執行部会は、できるかぎり多く開催しよう（意志の疎通と団結を図る）。
- ④ グチを絶対に言わず、林業に自信と誇りを持とう（後継者対策上不可欠。）
- ⑤ 家族を大切にしよう（山づくりは家族づくりから、家族の支援協力が必要）。
- ⑥ ただひたすら頑張ろう（決めた以上迷いを断つ）。

以上、6つの方針を確認し、活動を続けてきました。今では会員数も127名へと増加し、町はもとより、町民からも期待されるグループへと頑張っています。

3. グループの活動の状況

(1) 自立独立と仲間づくりの輪を広げる

再出発後は、会員の連携強化と自立、そして、地域で認められる林研を目指そうということで、定例会を毎月開催すると共に、視察研修や、県が行う各種研修会にも積極的に参加し、林業技術をマスターし、今では、講師として依頼を受ける会員も出てきています。

また、地域との結び付きを強める目的で、町の商工会青年部、各種グループとの意見交換会の開催や農林業体験学習交流会の開催などを行い仲間作りに向けて頑張っています。

(2) 活動資金づくり

会の運営を図るためには、自分に使える活動資金が必要です。そこで、今までに、次の3つの共同作業を実施し、活動資金を確保しています。

- ① 会員の技術を生かした間伐事業（昭和63年度）（会収益190万円）
- ② 有線放送施設撤去（平成5年）（会収益190万円）
- ③ 国道支援木の枝打・除間伐（平成10年）（会収益70万円）

(3) 山づくりと生産性向上

会員の山づくりと生産性の向上を図るため、平成3年より会が事業主体となり、機械の装備を進め、講習会により技術の向上を図ると共に、間伐の実施や作業道の開設に取り組んでいます。

- ① 作業道の開設 3路線 2,000m
- ② 間伐作業（共同作業）毎年約10ha

(4) ケヤキ林を活用した森林・林業のPRと後継者の育成

平成4年に会員の一人が、4haの山を購入し、ケヤキを造林しました。このケヤキ林を森林・林業のPR用並びに会の活動の拠点の一つとして利用しています。

(5) チビッコ部会の結成と活動

子は、親を見て育つと言われます。後継者が少なくなる現在、自分たちの子供をどう育てるかは、大変重要なことです。そこで、平成5年に「チビッコ部会」を結成し、次のような活動を行っています。

- ① 会員の子供で小学校1年生になると、会員としての認定証を交付する。
- ② ケヤキ山への植樹と保育作業を行っている。
- ③ 毎年、会主催でチビッコ森林・林業体験学習会を実施している。
- ④ 平成8年には、神戸被災地の子供達とチビッコ部会が交流している。

(6) 森林ボランティア活動の受け入れと実行指導

平成 10 年度県民参加の森林づくりボランティアを受け入れ、ケヤキ林において、4 ha の下刈りを会員指導のもとに実施しました。

(7) 婦人部会の結成

家族を大切にしようということが、会の重要な方針の一つであることから、平成 6 年に婦人部会を結成し、家族ぐるみで活動に取り組んでいます。

(8) 地域づくりと各種行事への参画

地域一体となった林研活動を進め、お互いの活動を共有すべく、美馬郡で毎年行われている「美馬林業まつり」への積極的な参加や郡内の他の林研グループとの研修会などを行っているほか、次のような地域活動を進めています。

① 水質四国一の清流穴吹川の清掃

森林と関わりの深い町のシンボル穴吹川を美しく保つため、平成 3 年より会員がボランティアで穴吹川の清掃作業を開始しました。こうした活動を町が認め、平成 5 年からは、町が取り組むこととなり、多くの町民が参加して穴吹川クリーン作戦として定着し、毎年実施されています。

② セーフティアンドクリーン大作戦

平成 7 年度より会が主催し、地域の団体等に働きかけ、国道 492 号線の清掃と見通しの悪い箇所を支障木の伐採や枝払いをボランティアで毎年実施しています。（延長 18km 地権者 88 名）

③ 阪神被災地への緑化支援（平成 8 年～10 年）

阪神淡路大震災の被災地に緑を取り戻す「ひょうごグリーンネットワーク支援」の一つである苗木のホームステイに参加し、宝塚市で植栽などを行ってきました。

4. グループが地域に及ぼした影響

(1) メンバーの生産活動

① 林業機械の積極的な導入と作業道の開設、講習会などにより技術が高まり、林業の生産性が上がっています。

② 会員相互の理解と仲間意識が高まり、多くの林地で共同作業が行われるようになっていました。

(2) 会員の日常生活に及ぼした影響

① 兼業のサラリーマン会員は、家族で日曜林業を行うものが増えていました。

② 夫婦会員 19 組、親子会員 10 組と家族での入会が増えており、家族の絆が深まっています。

③ 婦人部会員が行動的で、明るく、元気に、美しくなっています。

(3) 地域へ及ぼした影響

① 会員の拡大により広範囲での仲間づくりが進み、穴吹町の各種協議会に参画するとともに、町の全面的な支援をいただいています。

② 除伐、間伐等の森林の手入れに対する関心が高まり、森林組合や本会会員の仕事が増加しています。

③ 隣接する所有者同士の交流が再開し、不在村森林地主対策上、効果が上がってきています。

- ④ 本会に刺激され、穴吹町内で2つの林業グループが結成されました。
- ⑤ 地域づくりに対する理解の深まりにより、行政に一方向的に頼る気持ちから自己責任で自主的に取り組む気運が高まり、地域のボランティア活動が活発になってきました。

以上、会員の林業意欲の高まりにより、自信と誇りを持って、家庭、林業、社会活動に積極的に取り組んできた古宮地区 250 人の生き方、考え方が、8,000 人の穴吹町全体のみならず、町外からも幅広い理解を得ています。

5. 今後の目標

昭和 63 年新執行部で再出発した本会は、会員の熱意あふれる努力と団結、関係機関と地域の方々の温かい支援により、当初の予想にはるかに越える成果を上げることができました。

今、周囲に目をやれば、グローバルな経済社会と地域環境の悪化、外国産木材の輸入に大きな障害が起きたとき、我々の取り組んできた林業が、地球環境の維持や木材の安定供給に向けて大きな社会的役割の一翼を担うことができるのではないかと、現在までの実績に自信と誇りを持ち、今後は、さらに、森林の整備、生産性の向上のための林道・作業道の推進、きめ細かい後継者対策、不在村地主対策に取り組み、昭和 43 年 9 月結成時、先人たちの大きな夢と希望であった「林業で豊かな生活」を実現するため、地域一体となったボランティア活動など社会活動にも力を注ぎ頑張っていきたいと考えています。

木頭村林業振興会

所在地： 徳島県那賀郡木頭村大字出原

代表者： 橘 本 堅 次

設 立： 昭和 47 年 2 月

会 員： 男 38 人・女 1 人

年 齢： 35 歳～85 歳 平均 66 歳

主なプロジェクトのテーマ

- 間伐施業の推進
- 乗用モノレールの普及
- 林道・作業道の促進
- 炭焼き

1. 地域の概況

木頭村は剣山山系の南部に位置し、那賀川の源流域にあたり、徳島市より、約 95km 山間部へ遡った場所にあります。このため、地形は概ね急峻で、その殆どが森林で覆われており、村土の 98%にあたる 22,837ha が森林です。その内、民有林が 94%を占めており村内の森林の殆どが民有林となっています。民有林の人工林率についてみると 74%と徳島県下でも有数の人工林を形成しています。木頭村は木頭林業地帯に含まれている町村の一つとして明治 30 年頃よりスギの植栽がおこなわれており、現在植栽されている樹種もスギが殆どです。

昭和 35 年頃には約 4,000 人であった人口も現在では約 1,900 人まで減少しており、現在も年々減少を続け、高校就学と同時に村を離れる等、他の山村と同様、少子高齢化が進んでいます。

木頭村は木頭ユズの産地として有名ですが、第一次産業の専業従事者は減少しており、土木業等との兼業により生計を立てている農家が多くなっています。また、林業についても近年の材価低迷により村民全体の林業に対する熱意は失われつつあります。森林の不在村率も 7 割近くあり、この事も原因の一つと考えられます。

2. 木頭村林業振興会設立の経緯

林業が好況であった昭和 47 年に村内の林業家数十名により結成されました。木頭林業地帯は平均気温 13℃、年間降水量約 3,000mm 以上という温暖多雨な気候を利用して、旧来よりヘクタール当たり約 800 本の粗植による造林を行い、伐期の比較的短い林業経営が行われてきました。戦後より他地域の林業技術の流入等もありヘクタール当たり 3,000 本程度の密度で植栽されるようになりました。このため、適正な間伐施業等の新しい林業技術と、これまでとは違った林業経営の普及、習得に努めてきました。

3. 現在の活動状況

設立時とは社会状況等も変動してきており、以前のような林業経営は望めなくなってきました。特に

約 11,000ha を占める 5～9 齢級のスギ人工林の間伐実施面積が年間約 350ha 程度と、森林に対して必要な手入れが十分にされなくなってきました。

木頭村林業振興会では間伐施業の促進を主要な活動方針にあげています。これは、森林の公益的機能の高度発揮という面だけでなく、間伐等の施業を通じて、将来、これらの森林が伐期を迎えたときに高品質の材が生産可能となる体制を整え、村の産業として林業が自立できる事を目標の一つとしているからです。

地域の概況でも述べたとおり、木頭村は間伐施業を通じた中間収入の確保にまだ不慣れな点があります。これに近年の材価の低迷も加えて、山からの現金収入を得る事が困難となっています。

このため、近年は先進地の視察に力を入れ、県等が主催する技術講習会にも積極的に参加しています。また、視察等を通じて得た知識を基に村役場等の行政側への林業施策に対する働きかけも行っています。

このほかに、中学校の授業に振興会が講師として参加する形で、村内の中学生への講習会活動を行っています。これはかつて林業で栄えた村の風土や歴史を学んでもらうだけでなく、将来の木頭村の担い手である中学生に林業について理解と意識を深めてもらうことも目的としています。

主に次のような活動をおこなってきました。

① 枝打ち、間伐講習

これは、木頭中学校の学校林で（昭和 56 年植樹）植栽後必要な作業を授業として行っているものです。現在は間伐、枝打ちが必要な林齢になってきたことから、枝打ち、間伐を小面積ずつ隔年でおこなっています。鋸や鉋を初めて手にする中学生が多く、間伐、枝打ち等の森林整備への理解をしてもらう貴重な機会として、今後も継続して行っていく予定です。

② ブナの苗木植栽

木頭村の観光名所の一つである剣山スーパー林道の法面へブナの苗木植栽を 10 年前より行っています。緑の大切さを中学生に理解してもらおうと行っているもので、森林組合等とも協力して行っています。平成 9 年よりヘキサチューブの装着も講習の一環として行い、野生動物との共存の難しさについても教えるようにしています。

昨年度はこれまでの活動とは少し異なった試みとして振興会主催の講習会を 2 つ行いました。

① 乗用モノレール設置講習会

木頭村では地形が急峻であるため林道、作業道の開設コストは高く、林内路網密度は 10m/ha 弱に留まっています。このことが、材の搬出は無論のこと通勤においても効率的な作業を行う上でネックとなってきました。数年前、会員の一人が乗用モノレールを自分の山に導入したところ、通勤時間や作業に係る疲労も大幅に軽減され、また、開設も林道、作業道に比べ安価で時間もかからないことがわかり、モノレールの導入に積極的に取り組んでいこう、という気運が高まってきました。

しかし、技術の習得には正式な講習を受けることが必要であるので、モノレールメーカーの一つで、四国に本社のある K 社から技術者の方に講師として来ていただき 3 日間の講習会を開きました。

この講習会は実際に参加した会員がモノレールのレールを敷設し、機械の調整方法も実際に機械を分解して学ぶなど、実地に基づいた講習会でした。最終日にはレール敷設と機械の調整に関する試験も行い、その結果、会員の中からレール敷設可能な技術者が 13 名誕生し、木頭村林業振興会内にモ

ノレール設置技術者会を作り、会員内外からのモノレールに関する相談にのれるような体制をつくっています。

② 炭焼き講習会

以前木頭村でも炭焼きが行われていましたが、今回間伐材の有効利用を図るため、木炭の製品化だけでなく、木炭や木酢液を村内に数多くあるユズ畑の土壌改良材等として使用することを目的としてスギ、ヒノキ間伐材で炭焼きを行いました。

ここでは手軽なドラム缶窯による炭焼きに挑戦しました。集落近辺でも放置されている森林が多く、だれにでもできる簡単な方法であれば、少しでも山に対する意識が戻るのではないかという思いもあり、この方法を選びました。

講習会は2回行い、会員の中に経験者がいないことから1回目は振興会役員が中心となって集まり、書籍等の資料を頼りに暗中模索の状態、窯の作成から炭焼きまで行いました。

2回目は1回目の講習会後に何度か炭焼きの練習を行い、これをもとに中学生への講習会を企画しました。幸い木頭中学校に授業の一環として協力していただけることになり、午後の授業時間を使って、窯の作成から火入れまでを行いました。後日、窯出しを行いました。講習を受けた中学生の山や木材への関心も高まったようでした。炭焼きの時にユズや木の葉等も焼きましたが、きれいな飾り炭に仕上がりました。こちらも中学生には好評でした。

今年度は日本炭焼きの会副会長の杉浦銀治先生をお招きして、第2回目の中学生への炭焼き講習会を実施致しました。

4. 現在の問題点と今後の活動方針

① 新規会員の獲得

木頭村林業振興会の問題点として会員の平均年齢が60歳を超えており、30代、40代の会員が殆どいないということがまず挙げられます。木頭村の林業は他の地方と同じく依然として厳しい状況が続いており、このことが第一の原因として挙げられます。しかし、このような状況だからこそ楽しく前向きに取り組んでいく姿勢が必要なのではないかと考えています。

村内には数は少ないものの、農家林家の後継者や森林組合の労務班、民間の林業事業体等でも若手の方が林業に従事しています。今後、これらの人たちにとって魅力的な事業を積極的に行い、新規会員の獲得に努めていきたいと考えています。また、先進地視察や他地域の林研グループとの交流なども含め、会員が集まり意見を交換しあう場をこれまで以上に設けていく予定です。

② 間伐の推進

これまでも、木頭村林業振興会の活動の柱として間伐の推進に取り組んできましたが、材価の低迷もあり、村内の小規模山林所有者等の意識を山へ向けるまでは至っていません。

昨年度実施した乗用モノレールの講習会やこれまで数多く行ってきた先進地での視察経験をもとに、振興会が実施主体となった間伐施業や国県等の補助制度の勉強会など、村内への普及、啓蒙活動により力を入れていきたいと考えています。

③ 森林・林業への意識向上

これまでも述べてきましたが、村内全体で山に対する関心が失われつつあります。林業のみで生計を立てていくことは難しく、また、以前のような山を採草地として利用するなどの農林一体となった生産活動も行われなくなっています。

しかし、木頭村は村土の殆どが森林で覆われており山と絶え間なくつきあっていくことは不可欠といえます。これまでも、中学生に対し枝打ちや間伐の講習会を行ってきましたが、昨年度より始めた炭焼きも含め、林業従事者や山林所有者以外の村民にも山に対して興味がわくような事業を行ってきたいと考えています。

The 山 師

所在地： 徳島県麻植郡美郷村大字別枝山字中筋

代表者： 鎌 谷 輝 昭

設 立： 平成 11 年 5 月

会 員： 男 11 人

年 齢： 36 歳～52 歳 平均 44 歳

女 4 人 (アドバイザー)

主なプロジェクト

- 美郷村にある豊富な山林資源の有効利用 (間伐材の有効利用)
- 木を通じた人とのふれあい

1. 地域の概況

美郷村は、徳島市より約 45km の所に位置し、人口 1,470 人、森林面積は 4,157ha で、村の総面積の 82%を占めています。吉野川中流から少し入った里山ですが、気候・土壌等の自然条件がスギの成長に適していることから、人工林率は 63%に達し、そのうちの 68%がスギで、このうち間伐等の保育が必要な森林が 60%を占めています。昭和 45 年に当村のゲンジボタルが国の天然記念物に指定され、6 月初旬には「ほたるまつり」を開催し、美しい光のシンフォニーが奏でられます。また四国有数の収穫量を誇る「小梅の生産地」として名を馳せ、毎年 2 月には「梅の花まつり」も開催される、小さいながらも自然がいっぱいの非常に美しい村です。

2. グループ結成の動機と経緯

美郷村の林業は、所有規模も小さく、兼業林家等を中心とした林業が展開されています。私たちのグループも、平均 8 ha の小規模林家の集まりです。そうしたことから、私たちの会員は、当初、美郷商工会青年部として活動をしていましたが、10 年程前に北海道へ先進地視察を実施し、その折に話題に上がったのは、「美郷の木を使ってログハウスを造ろう」ということでした。帰ってから、毎週日曜日に会員が集まり、1 年半かけて手作りでログハウスを建築し、「酔勢館」と名付けて、私たちグループの事業所兼活動拠点として利用しています。これを契機に、地域での課題についても学習するようになったわけですが、いつまでも景気の低迷が続く中、典型的な過疎地域である美郷村では、村民の高齢化、若年層の減少は誰の目にも明らかで、将来に対する不安も大きくなるばかりでした。何か将来のためにしなければということから、5 年前に地域林業の活性化を含めて勉強しようと、「美郷の夢を語ろうじゃない会」を発足させました。

私たちのグループは、異業種の集まりであるため、学習の機会をできるだけ多くもって取り組む中で、美郷の林業の衰退は、森林災害にもつながるという問題に直面し、これからは、森林整備の推進と併せて間伐材の商品価値を高め、若い人が魅力を感じる林業にしようと、2 年前に、名前も新たに、林研グループ「The 山師」として活動が行われるようになりました。

3. グループ活動の状況

私たちのグループは、林業、小売業、建設業、製材業、自動車整備業等の異業種に携わる 11 名で構成され、会員以外に商品開発アドバイザーとして女性 4 名がいます。こうしたことから、主な活動は、昼間の仕事を終えた月・水・金の夜間と休日に活動しています。

(1) 課題に対する学習活動

「美郷の夢を語ろうじゃない会」を発足してから、学習会を重ねる毎に、昨今の林業の衰退と環境問題に着目し、商品価値の低い間伐材の有効利用を図り、若い人が魅力を感じる林業にしようと結束し学習活動を続けています。①間伐技術、作業道開設等森林整備の学習、②人材育成と地域活性化の勉強会、③木工商品製造業者の先進地視察と木工加工技術の向上、④都市部での消費者動向の調査・研究、⑤商品開発の方向性、マーケットの研究

(2) 間伐材の商品化とグループの自立

最初は、間伐材で何を作ればよいのか、試行錯誤の繰り返しでした。このような時に、高知県の「木星会」の川村さんに出会い指導を仰ぎました。それからは、「自然の素材（木）の良さ」を活かすことをコンセプトとして間伐材の商品開発と環境に優しい商品づくりで活力ある美郷村にするという大きな目標をもって取り組むこととなりました。

① 間伐材と炭化を組み合わせたガーデニング商品等の開発と取り組み

ア 平成 11 年 2 月、神戸市で開催された「美郷の日フェア」へ手作りの間伐材ガーデニング商品を出品し、同時にマーケティング調査を行い、その時の消費者の反応の良さに、私たちの商品開発コンセプトに対して自信を深めました。

イ 平成 12 年 2 月、平成 13 年 2 月、東京都で開催された「ギフトショー」に間伐材のガーデニング商品を出品しました。出展にあたっては、外部デザイナー、花小売店、園芸業者等との企画会議を行い、デザイン・出品商品・小売価格の決定・カタログの作成等、約 1 ヶ月位は、会員が一丸となり取り組みました。この努力が報われたのか、予想以上の反響があり、私たちの今後の商品開発の方向が見えたように感じました。

ウ 平成 13 年 6 月、間伐材を使用した木製品の作品展の開催

森林・林業への理解と販路の拡大をめざして隣の山川町で開催しました。丸太照明器具等の新たな商品開発を図り、作品を展示したことにより、大きな好感と理解が得られました。

② 環境に配慮した商品の開発

私たちの間伐材利用技術の向上と共に、美郷村の林業及び地域の活性化に結びつく大きな評価を得て、最近では、観光や林業の案内板・各種案内標識・公営施設や小売店等の商品陳列棚等、各方面から依頼が来て、今では、村内外のいたる所で私たちの作品が見られるようになり、間伐材の利用が進んでいます。

(3) 地域との交流と木工体験教室の開催

① 各種イベントの参画と支援

ア 毎年 2 月、6 月梅まつり、ほたるまつり

イ 平成 12 年 2 月 12・13 日 東京ビックサイトで開催の「森林へおいでよ全国ツアー」に参

加・出展

ウ 平成 13 年 4 月 29 日、東京都で開催の「緑の感謝祭」に出展

② 木工体験教室の開催及び支援

ア 県内の女性グループ交流研修会受け入れ（木工体験と指導）（平成 12 年 10 月 24～25 日、女性 50 名）

イ 小学生対象の木工体験教室の開催（2 回）（平成 12 年 7 月 13 日東山小学校全校生 20 名）
（平成 12 年 12 月 12 日 村内 3 小学校合同 5・6 年、40 名）

(4) ほたるキャラクターの商品開発と地域おこし

ほたるで知られる当村で、村が「美郷ほたる館」を建設することになり、この時、これまでの私たちのアイデアと活動が認められ、村よりおみやげになる、ほたるキャラクターの商品開発の依頼がきました。企画会議を何回も行い、5 点のキャラクターを提案いたしました。中でも、自然環境の破壊に問題提起をする「ほたるの絵本」は、ほたるの里美郷村を PR するうえからもよかったと自負しています。これらのキャラクターは、今では、真新しい「ほたる館」に、私たちが製作した丸太陳列棚と共に並べられています。

4. 地域へ及ぼした影響

私たちは、美郷村の林業の活性化及び地域の活性化につながる活動を心がけ取り組んでいます。会員も、少なからず山を所有しており、この山を守るために、作業道を開設したり、森林の整備をしています。一方で、商品価値の低い間伐材の有効利用について頑張っています。

今では、こうした私たちの熱意と活動が行政側をはじめ地域においても、認められ、間伐材の利用拡大と環境保全に対する意識向上が図られつつあります。また、間伐材の利用意識の向上を通じ、森林所有者の施業実施協定による団地間伐を含めた森林整備に関する意識の向上が図られてきています。

なお、こうした私たちの活動が平成 12 年度徳島県ふるさとコンクールにおいて、チャレンジとくしま推進協議会会長賞を受賞しました。

5. 課題と The 山師の夢

私たちのメンバーは、商品を作るのは得意であるが、商品開発、デザインとなると弱くなります。それを補うために女性 4 名にアドバイザーとして参画して頂いておりますが、このアドバイザーの意見をどのように商品作りに反映させるかが当面の課題であります。また、外部の優秀な指導者の指導にしても、この指導力を活かす力が私ども The 山師に欠けていたら事業の成果は上がりません。

最後はメンバーの力です。メンバーが、日々レベルアップを心がけなければ The 山師に将来はありません。私たちが掲げた『若い人が魅力を感じる林業』、そのことが地域活性化につながり、高齢者も若い人も美郷村に魅力を感じるはずです。そして、自然が残っている美しい郷、美郷村を守るためにも、環境問題を考えて間伐材の有効活用を提案していくと共に、将来のある子供達へ木工教室やホタルキャラクターを通じて、森林・林業及び自然の大切さを訴えていこうと思います。

あわいけださんすいかい
阿波池田山水会

所在地：徳島県三好郡池田町西山字中塚 1092

代表者：増原武一

設立：平成5年12月

会員：男4人 女2人

年齢：48歳～78歳 平均67歳

主なプロジェクト

○炭焼き技術の保存・伝承

炭焼きの保存・伝承をテーマに活動し、「生活住炭」を商品化

1. 地域の概要と会の結成

私たちの住む徳島県池田町の下野呂内地区は、徳島県池田町と香川県琴平町を結ぶ国道32号線から西に入った所にある。

ここでは雑木林や松林が多く、明治ごろから伏せ焼きによる製炭が盛んだった。多いときには40名ほどの炭生産者がおり、昭和30年頃までは地域の生計の重要な位置を占めていた。

しかし化石燃料への移行により段々と生産量が減少していき、出稼ぎなどで地域を出ていく家族も増えてきた。

そんななか、平成5年3月に私たちの集落の中心であった下野呂内小学校が休校となったことにより、このままでは高齢化が進み、地域の衰退が加速してしまうのではないかと、大きな危機感を持ち始めた。

これを防ぐために、地域の若者と高齢者が協力しあい、いきいきとした山村社会を形成していこうと、「炭焼き技術の保存と伝承」をテーマに、山村振興の担い手集団、下野呂内「山水会」を平成5年12月12日に設立した。

2. 活動内容

(1) 「下野呂内フェスタ」とジャズライブ

まず、手始めに特産品であった炭を復活させるために炭窯をつくり、会として炭焼きを始めた。そして、会のテーマである炭焼きの保存と伝承のため、この休校になった学校を利用して、「下野呂内フェスタ」を開催することにした。

「下野呂内フェスタ」の第1回目は平成6年10月2日、地元の力を結集して「炭焼き体験とジャズライブ」を行い好評を得た。

昼間は、炭窯に炭材をつめたり、袋詰めをする体験作業を行い、夜は小学校校舎でジャズのコンサートを行うという、大人も子どもも楽しめる大変楽しいイベントとなった。このジャズイベントは平成8年まで3カ年間続けた。

炭は、3年後には4,000kg程度焼けるようになった。平成8年度には、県の自然とのふれあい施設の合併浄化槽の浄化のために、松炭1,000kgを生産・提供した。

平成9年度には、鳥取県で開催された全国炭サミットに参加した。そこで木酢液の作り方やその効能を聞いた会員から、「これからは木酢液づくりにも取り組んでいかなければいけない」との意見があり、試行錯誤を重ねてきたところ、14年度になってやっと製品化できるようになった。

(2) 炭焼き体験学習

9年からの炭焼きフェスタは、地元にある3つの小学校の子どもたちの炭焼き体験作業を行い、より地域との交流を深めている。炭をつかった電気の科学実験やバーベキュー大会も行い、子どもたちは真っ黒になりながらも楽しい自然体験ができたこと、大喜びだった。「炭が燃料だけでなくいろいろなものに利用できることがわかりました。すごい力があるんですね」と感想を言ってくれた。

平成11年11月には町外の小学校からも炭焼き体験学習の申し込みがあり、大勢の小学生を受け入れた。このときには、テレビの取材もあった。

平成11年の4月には、会の存在を広く知ってもらい、活動を町全体に広げるために名称を「阿波池田山水会」に変更した。また、新たな炭窯づくりに取りかかった。幅2m、高さ1.2m、奥行きが2.5mの煉瓦づくりの大きな窯で、以前の1.5倍、約400kgの炭が1窯で焼けるようになった。

(3) 「生活住炭」の商品化

また、この年の7月には県の「魅力あるお宝発見事業」により、池田ブランドの炭の商品化を行うことになり、県や町と検討会を重ねた。半年間検討した結果、生まれたのが、三角形の紙箱に炭を詰めた「生活住炭」である。「炭窯をイメージした特徴的な形にしよう」という意見から生まれた。箱には炭窯の絵が描かれており、除湿消臭効果のためにそのまま部屋に置いてもいいように小窓をつかった。

1月に日本炭焼きの会副会長杉浦銀治先生が、山水会の炭窯を見学に来られ、そのとき炭に「生活住炭」と命名していただいた。この生活住炭という名前には、炭が空気をきれいにしてくれるので、生活空間が隅々まで健康的になり、炭を買った人も炭の生産者もともにいきいきしてくるという意味が込められている。

この、生活住炭は、三好町にオープンしたハイウェイオアシスでも販売している。徳島市や高松市での緑のフェアや全国イベントにも持参し披露した。市内での店頭販売のほか、電話での依頼も増え、全国に発送するほどになった。

(4) 他グループとの交流など

平成13年2月には県で養成している森の案内人30名が2週間にわたって本格的な炭づくりを行った。これは、炭材を詰めるところから始まり、1週間後の炭出しまで一貫してメンバーの手で行った。森づくりと炭づくりは相通じるところがあり、今後も案内人の方々との交流を通じて自然の豊かさを伝えていけたらと思っている。

また、平成13年度からは毎年、池田中学校の2年生が農林業体験を行うこととなり、当会へは30人ほどがやってきた。炭焼きはもちろん、森の仕組みや利用について学んだり、原木の伐り出しなどを行う2日間の体験会は子どもたちからもいい感想がえられており、これからも中学校と協力して、継続していこうと考えている。

木炭の生産実績としては設立してから10年間で2万7,492kgを生産している。最近では8カ所の窯

で年平均 2,749kg を生産している。また竹炭の生産にも力を入れている。14 年度からは木酢液「森のしずく」の生産にも取り組んでいる。

3. 今後への展望

また、平成 13 年度からは三好郡内の炭焼グループ 10 団体があつまり、三好郡炭の会を結成し、様々な意見交換や検討会を行っている。

地域ではこれまで小学校を公民館として利用してきたが、15 年 7 月に、学校の敷地内に木造のコミュニティセンターが完成した。

この施設の調湿のために、地域の特産品の炭を利用しようということになり、昨年度に大量の炭を焼き床下に敷き詰めている。コミュニティセンターの完成により、炭の効用が実感できるとともに、これからは滞在型の炭焼き体験や、都市との交流に利用していこうと考えている。

かみかつ あいりんかい
上勝なでしこ愛林会

所在地： 徳島県勝浦郡上勝町大字生実字雄中面 84

代表者： 篠崎 佐千代

設立： 昭和 62 年 2 月

会員： 女 5 人

年齢： 45 歳～64 歳 平均 55 歳

主なプロジェクト

- 森林ボランティア活動により放置森林の解消
- 林業教室、交流会等により森林・林業への理解を深める活動
- 伝統的山村生活（食文化、生活道具製作技術等）の伝承
- 山野草等の山村資源を活用した健康産業の創成

健康のためになる山野草を商品化、インターネット販売も

1. 地域の概要

上勝町は、四国山脈の南東部に位置し、森林面積が総面積の 85%に当たる 9,375ha を占めると共に地形も、標高約 100m～1,400mとその高低差は大きく、標高 600m以上の地域が 65%を占めている典型的な山岳地域です。

森林の人工林率は、83%に達しており、その内 91%がスギで占められている県下の有数の林業地域です。

上勝町の基幹作業は、農林業で、林業部門では、平成 8 年度に設立された木材加工販売会社／「第三セクター(株)もくさん」を中心に町産材のスギを使った林業に取り組んでいます。

一方、農業部門では、シイタケや彩り産業（料理の妻物）の生産が盛んです。

また、これらの林業、彩り農業、菌床シイタケの産地化等の基幹産業の振興に取り組むと共に交流や第三セクターまた 1Q（いっきゅう）運動「住民一人一人が町の課題に取り組む運動」といった町の振興施策により「活力ある町づくり」に取り組んでいる地域です。

2. グループ結成の動機

私たちグループの会員は、個々に林業・育林を仕事としていて、人とあまり接することのない山の中で仕事をしています。町中で開かれる会議の席での自己紹介でも、よく例えに「人間が住んでいるところとシカやサル等、獣の住んでいるところとの国境に住んでいます」と言っているくらいです。

そんな折り、林業関係者の仲間が集う植樹祭のイベントへの参加がきっかけで、私たちと同じ林業の仲間と接したい、大勢の仲間の中へ加われるように、活動を開始しよう！と思うようになりました。それがグループ結成の大きな動機です。

3. グループの活動状況

(1) 森林ボランティア活動

上勝町に訪れた都市の人が、「スギが、こんなところまで植えられている…」とスギの植林が、まるで山地災害や水不足の原因でもあるかのように言っているのを聞いた時、丹精込めて育てていた私たちのスギは、こんな風にしか見てくれていなかったのかと大変なショックを受けました。

「みんなにこの木のすばらしさを教えなければ…」「放置林を無くさなければ…」「きれいな水を都会や海まで流したい…」との願いを込めて、川下の人たちを募集し、一緒に森林ボランティア活動を平成8年度から毎年継続実施しています。

昨年も10月26～27日に開催し、天候にも恵まれ延べ97名の参加がありました。21世紀は環境の時代と言われています。今は、林業や森林の追い風を感じています。

(2) 上勝小学校児童を対象とした林業教室

地元上勝町の小学児童1～2年生を対象に「名付け会」と称した林業教室を平成9年度から開催しています。

「名付け会」とは会員のスギ林に子どもたちを招き、子どもたちに自分の好きな木を一本ずつ選ばせます。そして、その子が大きくなって、この森に来たときに、自分の成長と木の成長とを重ね合わせられるようにと木の幹回りを測らせています。そして、選んだ木の側に、その太さとその子の名前や木への思いを記した記念の杭を立てていくのです。

秋にも「森に親しむ会」としてその森での散策会を開催しています。

森の中で、木の枝を拾えば、今の子どもでもチャンバラをすることが分かりました。子どもたちの元気な生き生きした目の輝きを見るのが、今では会員の楽しみのひとつとなりました。

(3) 城西高校生を対象とした間伐・枝打ち教室

毎年、秋に行っているこの行事では、太い鎖を腰にぶら下げて、ズボンはずり落とし、裾はすり切れ、思いっきり突っ張っている生徒もたくさん来ます。

こちらも負けずに、ステップ(秋本式木登り機)の太い鎖をちらつかせてやる。そんな接し方をし、一緒に山で作業をしたり、シカ鍋を食べさせたりしているうちに、だんだんそんな突っ張り生徒も素直になってきます。梯子に登って枝打ちしたり、間伐をして大きな木を伐り倒すのがやはり、おもしろいらしい様子です。これも森の持つ力のひとつなのかも知れません。でも、この日の最大の問題は、女子生徒のトイレの問題です。生まれてから外で開放的に用を足したことがある生徒はほとんどいません。これは、至難の業であります。

(4) 四国大学児童学科学生との交流会

徳島市にある四国大学生と山村、森林、林業についてともに語り、その中から新しい山村と都市との関係を考えていくことをテーマに交流活動を継続実施しています。

大学生と一緒に、会員の別荘?で、1泊して満天の星空を眺めながら山村料理やかまどで炊いたご飯を食べながら、夜遅くまで話し明かします。いわゆる学生と大人の合同合宿です。学生は、児童学科なので、子どもたちに交流を通じて感じたこと、思ったことを創作劇(ダンス)として県下各地で公演を行っています。一昨年は「山物語」と題して間伐の必要性を訴えてくれました。昨年は、「宇宙人からのメッセージ」と題して森の果たす環境への役割を取り上げてくれました。もちろん、私たちとの交流で学校とも縁が深まったため、勝上小学校では、最も力強く踊ってくれます。

さて、今年はどんなものを見せてくれるか楽しみです。私たちのできない方法で、山のこと、林業のことを子どもたち、そして私たち大人にもうまく伝えてくれたことに深く感動しました。

(5) 山村料理・道具・技術の習得と伝承

「消えゆく山村に伝わる料理を何とか伝え残したい！そして、私たちの活動の収入にも繋がれば」と今ではほとんどないかまどで炊飯することから始めました。手始めに、地元特産？のシカ料理を、東京から上勝町へボランティアで来ている「みどりのふるさと協力隊」の20歳の女性に教えました。ほんまもんの味噌を作るため無農薬、無化学肥料で育てた大豆も挽いてみました。

昔から伝わる道具に藁畚（わらふご）というものがあります。作るのは、地域の先輩に習って何度も練習が必要です。

技術面では、桜の木の接ぎ木も習いました。自分ではきれいにできたと思っても、伝え残していたり、ましてや販売するためには…完成度が問題です。なかなか難しいものです。

(6) 山野草で健康産業の創成

阪神淡路大震災の時、普段は食べ物にあふれる都会でも、食べるものにも困ってしまうほどの大変な被害にあったと聞きました。山村に住む私たちの所で、もし災害が起きたらどうなるのでしょうか？

私たちには全くその備えがありませんが、私たちの山には食材となる山野草等の自然の恵みがあります。山野草の勉強をして山の中でも生き抜きたいものです。戦争中の体験で彼岸花の球根から作る「つぶろ」というおもちの作り方をおばあちゃんから習いました。それ以来、山野草を食べることが頭の中から離れませんでした。そうしたところ、薬草で著名な徳島大学薬学部生薬専門の先生に出会う機会を得ることができました。今、人間の体に必要な物、それは化学肥料や除草剤が入った耕地から取れた物ではなく、山から取れた物、それはミネラルが豊富で体にいい、ということ学びました。災害時の備えにと思っていたことが、私たちのできること：山の恵みで体にいい食材を加工販売し広めたい、という気持ちになりました。早速、みんなで薬学部の門をくぐりました。

奥深い山村に住む私たちに販売ルートはありませんが、私としては販売方法は、インターネットと決めていました。仲間も分からないまま、流行のインターネットがいいと承諾してくれました。

インターネットのアドレスでよく使われる「〇〇ドット、〇〇ドット」が「エンヤートット、エンヤートット」としか聞こえなかった私が、ホームページを開くのですからもう大変です。ためしに、先生から教わった加工品をホームページに載せてみたところその反響に驚きました。春の一瞬の食材でしたから、次々にホームページに載せるためには、1年を通じて加工販売できる物を作ることが必要なことが分かりました。今は1年の計画を立てて、保存の利く乾燥した物も作り始めました。

4. グループが地域に及ぼした影響

森林ボランティアをしたことでは、町行政側の意識が変わり間伐補助金の上乗せをしてくれました。また、私たちの活動の影響もあってか、都会のボランティアに負けじと町民のみなさんも山に入って手入れをする機会が多くなったような気がします。

小学校や大学生との交流活動では、最初は細い繋がりでしたが、今ではしっかりとした強く太い絆ができてきたと感じています。

5. 今後の目標

「山に住んでいなければできないことをやろう」、「山にいるからこそできる体にいい物を食べ、まず自分たちが健康でいよう」そして「全国の皆様に健康のお裾分け」を。今後の目標は、このお裾分けのための「健康産業の創成」に力を入れたいと思っています。

(篠崎佐千代)